文明についての考察

Some Thoughts on Civilization

清川ゆりこ Yuriko Kiyokawa

要旨

本発表は，バハイの観点から文明概念の再構築を試みることを目的とする。2010 年度のレズワン･メッセージ[1]では「世界文明」の構築に至るまでの必要要件とプロセスに大きく焦点があてられている。この文明の到来に向けてどうわたしたちが準備すべきかを考察するためには，「文明」とされてきた事象の従来概念の見直しを図らなければならない。力で版図を広げ，「文明開花」の名の下に，個々の文化を併呑していくことを「洗練化」とすることが，歴史学を始めとする諸学問分野で概ね定められた見方ではなかっただろうか。一方，生物学では，多様に分岐していくこと，個性化こそを進化と考える。自然淘汰の中で生き延びているものは，環境の変化にあわせてしなやかに順応し，擾乱に耐えうる，より複雑で巧妙なシステムを備えたものへと進化する。

そして，非常に興味深いことに，レズワン･メッセージには，バハイの機構としての成長を生物の進化に擬える部分が見出される。万国正義院の指導のもとで能力を高めた草の根レベルの集まりは，計画と実施方法の一部について，意思決定を任されるまでに進化している。各機構間で協調関与が相互になされ，行政制度の構造とプロセスが複雑につづれ織りをなしている状況は，さまざまに起こりうる擾乱に対する効力として作用し，成熟するための必須条件ともなっている。

世界のあらゆる部分で旧制度の崩壊が進行している。しかしこれは，文明再生へ向けたパラダイム･シフトにほかならない。来るべき新しい文明の実現に近づくためにも，文明とは何か，バハイの見地からの見直しを図る。

急速に広まったインターネットは，不特定多数の人々を，国籍，信条，地理上の距離，年齢，職業他の諸条件を一瞬の内に超越し，互いに結びつける働きをしているかのようである。このように，個々に散在していたものを一つに統合するだけの作用を持ち，万国共通のプロトコールにより，及ぼす影響も広範にわたるものはなんと言い表せるであろうか。

作家，司馬遼太郎の言葉を引用してみよう。

---

[1] バハイ教におけるもっとも聖なる祝日と定められているレズワン（4 月 28 日）に、世界のバハイに宛てて発信されるメッセージで、バハイ共同体の運営方針や成長のための指針などが明確に記されている。

人間は群れてしか生存できない。その集団を支えているものが，文化と文明である。いずれもくらしを秩序づけ，かつ安らがせている。文明とは『たれもが参加できる普遍的なもの・合理的なもの・機能的なもの』をさすのに対し，文化はむしろ不条理なものであり，特定の集団（たとえば民族）においてのみ通用する特殊なもので，他には及ぼしがたい。つまりは普遍的でない。（1）

誰もが参加でき，その合理的機能を納得できるだけの魅力があれば，大多数の承認を得ることに時間はかからない。インターネットは，瞬時のコミュニケーションの場，個人の自由な発想の表現の場を提供する。インターネットはあくまでもツールにすぎない。だがこのツールによってつくり出されている情報化社会が，同じ興味，関心を共有する多数の特定集団を内包しながらも，現代の物質文明の一つの様相として世界を席巻していることに，異議を唱える者はいないだろう。

2010 年度のレズワン・メッセージには新しい世界文明の構築に至るまでに必要なプロセスに強く焦点が置かれている。この地球上に築かれてきた過去の文明はこの新しい文明がこれから築かれていく土台である。来るべき文明の到来に向けて，わたしたちは準備を進めなければならない。そのための一環として，「文明」とされてきた事象の概念の見直しを，バハイの観点を通して図ることにする。

そこで歴史学を始めとする諸学問分野で研究対象とされている文明について，オンライン情報を中心にどう定義されているかを調べてみたところ，二つに大別される印象を受けた。

1）未開なものが，より高い技術，文化水準による洗練されたものへと導かれる状態。
2）個々に存在する生活様式，文化を包含する大きな動き

さらに先の引用のように，普遍的なものが文明であって，特定の集団においてのみ通用する特殊なものが文化というなら，文明は多数の文化を内包した二重構造であると考えてよいだろう。つまりこれら二つのものは個別のものではない。むしろ個々に散在する未開なものを，一元的な高水準なものへと，統合していくプロセスの中で重なり合ったと考える方が適切である。人類史を振り返ればそれは明らかである。

人類は青銅器の獲得により，農業生産率を向上させ，軍事的優位性をもって個々の集落を併呑し，集落規模を拡大していった。この青銅器の後に現れた鉄器の使用でいえば，紀元前 15 世紀ごろ，現在のトルコに突如あらわれたヒッタイトはその高度な製鉄技術を強力な武器にメソポタミアを征服し，エジプトと世界の支配を二分するまでに広い影響力を及ぼした。

ここからは，ローカルで行われていたことが，軍事力や組織力などの強力な力の行使により，その影響や勢力を拡大し，一元化していったことがうかがえる。この拡大・一元化のパターンは，文明圏を築きあげたことが遺跡調査等により確認された歴史上の国家に共通して見出される要素であり，洋の東西を問うことがない。しかし振り返ってみよう。このように力の行使に頼り，版図を広げてきた文明で，現在に至るまで永続しているものはこの地上にあるだろうか？

「Civilization」（英語）の語源は，ラテン語で「都市」「国家」を意味する「Civitas」に由来する。文明とは，語源のままに都市化や都市生活のことであった。すなわち「標準」あるいは「高

水準」であると自認する一大勢力が，都市化の名の下に，水準以下だとする集団を力で征服し，版図を広げていくことが文明であった。しかしその推進の過程で蹂躙され消滅していった価値観，特定地域の文化様式は数多い。それゆえ，多数の文化を包含した二重構造が文明であるとは，一概にはいいがたい。

近代の帝国主義を振り返ると，産業革命によって大量生産時代の幕開けを切った国々の例があげられる。各国は，資源の獲得と勢力拡大のため，植民地政策に乗り出した。だが「未開」で「野蛮」との判を押され，強引な文明開化政策の下に属国化された熱帯，亜熱帯の諸国は，民族の自決を求めて次々と独立し，今では当時の支配の面影をみることはない。どんな形であっても，物質文明が永続を保証されることはない。どんなに栄華を誇っても，結局は衰退していく。高水準を至上とする一元化への急いた衝動が，内在する個々の多様性を押しつぶし，内からの反動を招いている。

ここで一つの文明史観をあげてみよう。狩猟採集時代の後に続く世界を，農業文明，工業文明，情報文明時代と三区分で把握したのが，アルビン・トフラーによる「第三の波」であった (2)。本書によれば，義務教育が課されるようになったのは，産業革命に始まった工業文明時代を体現する大量生産方式の中で働く労働者予備軍をつくるためであったという。個性を剥奪した制服で，一斉時刻に登校させることを義務とすれば，将来の欠陥製品の発生防止に確かに効果的だろう。こうしたシステムはしかし，整然とした全体の秩序づくりに貢献しても，精神の安らぎにはほど遠い。

このところ，勤務のフレックスタイム制，男性のための育児休暇の許可といった多様な働き方が，大きく普及をみせている。以前ならごく一部でしかみられなかったこうした動きがはっきりと表れるようになったのも，従来の画一的な働き方が行き詰まりをみせていることを伝えるものなのだろう。

2010 年度のレズワン・メッセージで謳われるように，わたしたちが目標とする「世界文明」では，物質文明に欠けた部分を補い，疲弊した精神に癒しをもたらし，輝きを与えるような精神文明が組込まれることになる。現代社会の混乱と動揺の中から出現することが運命づけられていながら，物質的要求と精神的要求の間にダイナミックな一貫性を達するものである。

ここで進歩の異なる側面に焦点をあててみよう。面白いことに，有機物の進化を考えると，その進化の方向は，より複雑で多様な方向への個性の分岐という特殊化の方向に向っている。文明を推進させる方向として有力視されていた「統一化」とは逆向きの動きが，生物学の中では観察されているのである (3)。たとえばインフルエンザ・ウィルスは，人類には脅威にほかならず，ワクチンによって撃退を図られても，弱体化することがない。亜種をつぎつぎと生みだすことで，人類のあらゆる努力を跳ね付け，したたかに活動の域を広げている。

そして，非常に興味深いことに，こうした生物進化を機構の成長に擬える記述がレズワン・メッセージ (4) の中に見出される。

> バハイの行政制度の構造とプロセス，関係と活動には，有機物と同様，万国正義院の指導のもとで進化するにつれ，ますます複雑な形態に成長しても，それに対応できる能力が体系の中に仕組まれているのです。(段落 21)

一般には，制度の構造とプロセス，関係と活動が複雑を極めるほどに，さまざまな混乱，擾乱，ひいては機能不全に陥る可能性が高まるのは避けられない。しかしバハイにおいては機能不全に陥ることはない。これはメッセージで明言されているように，有機物同様に，亀裂を生じずに対応できる能力が体系の中に仕組まれているためである。では仕組まれた能力とは何であるのか。このことを考察するために，少し，関連例を引いておこう。

有機生物においては，何らかの攻撃を受け，損傷することがあっても，機能を維持し続けられることが多い。われわれ人間も，病気になっても，多くの場合，回復し，温度や湿度，さらには酵素濃度などが多少変動してもそれに対応するように仕組まれている。DNA から遺伝情報は読み取られ，最終的にタンパク質がつくられる際にも，途中のいろいろなエラーに対して一連の修復機能が働き，正確に情報を読み取ることができる仕組みが備わっている。⑸

変動に対応できる能力の別例をあげれば，奈良の法隆寺の五重塔がある。この塔が 1300 年の風雪に耐えてきたのは，その「柔構造」にある。コンクリート造りで一体化した「剛構造」と違い，地震が起きても，複雑に組み合わさった各重が互い違いに振動して「揺れ」を吸収する。この柔構造理論は世界の高層建築の免震構造として，現代に継承されており，時を超えた普遍の価値を伝える好例となっている。

バハイには文化がある。それは，「学び」を行動様式の基盤とする文化と，「付き添い」と表現される共同体意識の進化の文化である。この二つの文化が密接に関連し合いながら進展してきたことで，バハオラの教えを来るべき文明の形成に応用する道を開いている。そしてこの二つの文化は共同体内の「揺れ」を吸収するうえで，「柔構造」のように何らかの作用を及ぼしている可能性があると筆者は仮定する。このことを例証するために，これらの作用について触れてみたい。

前者の「『学び』を行動様式の基盤とする文化」については，バハオラの教えと，その教えを実社会と分かち合うための方法を助け合いながら学び合うという趣旨であると思われるが，学びの対象としてもう一つ重要なものがある。それは次の言葉のように，ミスから学ぶことである。

更なる成長のためには，「ミスを犯す共同体」もが必要とされている。同じ過ちは繰り返すべきではもちろんないが，新しいミスを犯すのであれば問題はない。それは学んでいる，学びつつ進んでいる証拠である。⑹

前述したように，わたしたちの肉体機構においては，起きたエラーに対し，一連の修復機能が働いている。これは，エラーは起こるものであるという認識が機構内にコード化されていることではないかと考えられる。また一部の生物にみられる現象に「細胞内共生」がある。ある種のアブラムシが飛べるのは，あるバクテリアが細胞内共生しているからであるという。つまり，通常であればエラーとして排除されるべき異分子を敢えて受け入れることで，本来，アブラムシには持ち得ることのなかった機能の「飛ぶ」ことを可能にしている。飛べるということは，動く範囲が広くなる。それゆえ環境変動に対する強さを発揮することとなる。

バハイでいえば「付き添い」は学習者間のものに限らない。エラーやミスという異端の「バクテリア」を排除することなく，成長のためには起こり得るものとして，「付き添う」こと，「ミスから学びとること」が，機構自体への強化に貢献する。その過程においてわたしたちには寛容と忍耐の精神が育まれる。こうした文化が，地方から地域，全国レベルから，大陸レベルへと，一貫性

を軸とする機構の中に，しなやかな「柔構造」を導き，ますます複雑に構造化する共同体自体に，有機物そのものの強さを育くみ，その結果，亀裂を生じずに対応できる能力が体系の中に仕組まれていくと考えられる。

構造の柔軟性に価値を置く傾向は，一般社会にも見出されている。「ガバナンス」といえば，一方的統治を意味するものであったが，官民協働へと概念を変えつつある。全てを統治機関が管理統治しようとしても，地域や構成員の多様化が進んでいる現在，生易しいことではない。むしろ内からの反発を招くだけであり，経済停滞の時代にあってはなおさらに難しい。こうした状況下では，現場のニーズを知りぬいた市民や NGO との協働が欠かせない。この協働の場において，実効性ある知見を得るという見返りを行政は得られ，問題解決能力が増大する。条件によっては，市民や NGO に付き添うこと，あるいは，付き添われて伴に行動する場面もみられることだろう。

このように社会の動きも変化している。一元的な効率性重視ではなく，構成員の多様な潜在性を引き出すことに価値を置くことが，結局は，長期的展望からの高い利益がもたらされることに目覚めつつあるかのようである。人類は成熟段階に入ったといわれている。この段階に至るまでは，力づくによる一元化が，文明を前進させてくるうえで，ある程度やむを得ないことだったのかもしれない。それも進化の一過程であり「学び」の対象ともなりうる。バハイの世界観に照らせば，人類が辿ってきた歴史そのものが，学習のプロセスであったといってよいだろう。

バハオラは，「すべての人間は絶えず発展していく文明を推し進めるために創造された」(7) と述べておられる。それゆえ，私たち各人がその責任をはたさなければならない。文明の発展を推進していくとき，人は正直であるか，公正であるか，哀れみ深いか，愛情にあふれているか，またはその反対なのか，あるいはどちらでもないかを選択していく。与えられた選択肢の中からどの方向を選択するか，わたしたちは自由意思の行使を許されている。

文化は特定の集団の中でのみ通用する特殊なもので，そうした個々の文化を包含し，普遍性を持つものが文明であるという前提に戻ろう。行政構造と学習モードを世界共通のコードとして偏在させつつ，多様性を重んじる共同体の発展自体が，この前提を支持する在り方を示している。その一方で有機物と同様に進化し，ますます複雑な形態に成長しても，バハイの行政制度の構造とプロセスは揺らぐことはない。これは変動に伴う振幅を吸収しうる対応能力，「柔構造」が備わってこそ可能であり，価値観，時代の潮流の変動の中にあってこそ，その真価は発揮される。そしてこの能力は「学び」と「付き添い」によって構造化が進展するものと筆者は解釈する。数ある美徳の中でも，「寛容」と「忍耐」が，この二つの文化，学びと付き添いの中で育まれ，基軸を保ちつつも振幅を吸収する緩衝材となりうるゆえである。結果として，擾乱に耐えうるシステムのコード化が共同体全体の中で進行していく。

精神文明の発展を中核としつつも，物質文明とのより良いバランスに重きを置くバハイ共同体。打ち出されたこの世界観と，多数の多様な文化を内包する世界が重なり合うその向こうに，来るべき世界文明があるはずである。

引用文献

(1) 司馬遼太郎 (1989) .「アメリカ素描」，東京：新潮文庫
(2) アルビン・トフラー (1982)「第三の波」，徳岡孝夫，東京：中央公論新社

⑶ 文化と文明の違い：Biglobe 何でも相談室.
http://soudan1biglobe..ne.jp/qa4467892.html よりダウンロード (2010.9.1)
⑷ 万国正義院 ⑵010⑵ レズワンメッセージ.
http://www.geocities.jp/oneworld_international/library/uhj.htm よりダウンロード (2010.9.1)
⑸ 北野宏明, 竹内薫 (2007).「したたかな生命」, 東京：ダイヤモンド社.
⑹ NSA 通信第 12 号(2010).共同体成長の条件より：「バハイと文化」, カーン博士
⑺ ヘンリー・ワイル(1998). 魂・心意・精神, 本子・コールドウェル訳, 宇都宮：ベスト社